異文化コミュニケーション教育におけるカテゴリーとカテゴリー化に関わる構成主義の活用

――メタファー・DMIS・「異」を中心として――

山本志都[1]

1　研究の背景

文化人類学者で異文化コミュニケーションの父とも呼ばれる Edward T. Hall は、“Hidden Dimension（隠れた次元）”（1966）という本のタイトルの通り、無意識のうちに身につけた感覚として、文化が見えないところで人々に影響を与えていることを指摘した。異文化コミュニケーションや異文化理解における教育・研究で長年使用されてきた文化の「氷山」のメタファーは、このような Hall の文化観から派生してできたと考えられている（Granata, 2016; Nguyen, 2017）。

文化の氷山メタファーは、氷山の目に見える部分を「客観文化」、海中に隠れて見えないより大きな部分を「主観文化」（Triandis, 1972）になぞらえている。このたとえは、建造物や衣服、音楽、文学、経済システム、政治、言語、宗教、伝統行事など、文化といえば多くの人が最初に想起する明示的で体系化された客観文化だけが文化なのではなく、行動規範や価値観、コミュニケーション・パターンなど、暗黙の了解として共有されていることが主観文化として存在することを指し示している。それにより学習者は、見えないレベルでの文化の違いが判断や評価に影響を与え、異文化摩擦を引き起こすことについて学ぶことができる。

たとえば米国の平和部隊（Peace Corps）のサイトでは「氷山」（The Iceberg）と題する異文化理解教材が提供されている[2]。学習者はまず氷山について知っていることを尋ねられ、目に見える部分は全体の９分の１でしかなく、より大きな目に見えない側面のあることを学ぶ。次に、様々な文化的活動の写真や、文化の特徴としてリストに挙げられた項目の中から、観察可能なものとそうでないものを分け、より大きな目に見えない側面が目に見える側面に影響を与えることを考える。たとえば、祝日に行う特定の慣習など「見える」行動の背後には目に見えない宗教的な信念のあることや、謙虚さについての価値観が服装のスタイルに影響を与えることなどである。文化の氷山メタファーの教育や研究における活用は、米国をはじめとし、日本（e.g. 八代・町・小池・吉田 , 2009）、中国（e.g. Sun & Gao, 2020）、ルーマニア（e.g. Chira, 2015）、ウズベキスタン（e.g. Makhmudov, 2020）、フィンランド（e.g. Hemming, 2021）など、世界中で行われている。

文化の氷山メタファーが利用されてきた最大の理由はそのわかりやすさにある。また、異文化コミュニケーションが教育および企業の研修に本格的に取り入れられるようになったのが

1970年代から80年代にかけての国際化の時代であったことが関係しているともいえる[3]。国際化時代の主な関心事項は、国家間の関わりを増やすことや他国での経済活動を活発化させることであった。企業が生産コストの低い海外に拠点や工場を設けるようになると、技術移転や、派遣される駐在員とその家族の現地での生活を円滑に行えるようにするための支援が必要となった。したがって、他国の人々との交流をスムーズにするためには、コミュニケーション上の阻害要因を知り、摩擦に備えたいという動機付けが強かった。見えない部分がぶつかりあう氷山メタファーは、この文脈において、国家レベルでの文化間の差異とその影響を理解することに役立てられてきたといえる。

しかし近年では、氷山メタファーが静的で硬直的なものであることや、文化の本質主義的な理解を助長することへの批判が起こっている。この批判はそのまま、異文化コミュニケーションや異文化理解に関わる教育や研究への批判と重なっている。小坂（2009）は、伝統的な異文化コミュニケーションが、見える文化／見えない文化、表層の文化／深層の文化のような二項対立を用いることを通して、後者に重きを置きながら、普遍的な文化に関するコミュニケーションやパターン化の側面を論じていたがゆえに、静的な文化的特徴の相違を比較することが盛んに行われていたと指摘した上で、そのような伝統的なアプローチへの自己反省と自己省察が、異文化コミュニケーションでは既に起こっていると指摘している。

以下ではまず、氷山メタファーへの批判を異文化コミュニケーションにおける自己批判として取り上げ、次に異文化コミュニケーション研究者らが静的アプローチや本質主義と批判されることをどのように受け止めているかを概観しながら、本研究が取り組むべき課題を明らかにする。

2　研究の問題

2.1　氷山メタファーへの批判

構成主義（constructivism）の立場で異文化コミュニケーションの教育と研究に長年たずさわってきたBennett（2012; 2013; 2014）は、氷山メタファーの最も大きな問題として「物象化」（reification, Berger & Luckmann, 1966）を挙げている。物象化とは、人がつくったカテゴリーを実体化させ、つくったことを忘れて自然物であるかのように扱うことである。概念や制度といったものは人のつくり出した社会的な産物であるにも関わらず、これらを物象化すると、コントロール不可能で手出しのできない超人間的な存在、あるいは、モノであるかのように理解することが起こる（Berger & Luckmann, 1966）。

Bennett（2012）はさらに、文化間にある違いが氷山の衝突のように軋轢を生み出すというリスクを意識させることによって、文化を学ぶことの目的そのものを衝突回避に向けさせかねないことも問題として挙げている。Bennett（2014）によると、文化を氷山にたとえると、それが現実を定義するものとして作用して、感情的な経験をつくりあげる。たとえばタイタニック号を想起すること（氷山に衝突して沈没し、多くの人命が失われた悲劇）である。したがって、氷山のようなものとして物象化されている限り、文化とは危険で、神秘的で、水面下に隠

されたものとして扱われてしまうと Bennett は述べている。

Bennett（2013）は、文化を説明するために氷山のメタファーを使い続ける理論家に敬意を表しつつも、このメタファーを引退させ新しいメタファーを見つけようと、ブログ記事“Culture is not like an iceberg”（文化は氷山のようなものではない）の中で呼びかけた。Nguyen（2017）によると、文化に対する静的アプローチを批判して動態的アプローチを適用しようとすることは、理論的な論争としては活発であったもののメタファーにまでは及んでおらず、依然として氷山のような静的モデルが人気を保っていたが、Bennett（2013）のブログ記事を受けて42人の異文化論者（interculturalist）がこの問題を活発に議論し、新しいメタファーの創出を試みた。

このブログの中で Bennett は、氷山のイメージを取り払うべき理由を次のように説明している。まず、異文化コミュニケーション理論を背景としている人のほとんどは、文化を「モノ」ではなく、人々が意味と行動を調整し、制度的な産物と行動パターンの両方を生み出すプロセスであることに同意している。この点において、文化を本質主義化しているという人類学者や批判的理論家による非難はフェアなものではない。その一方で、多くの異文化論者が氷山のように客観的な比喩を用いて教えることは、文化を本質化しており、このような状況は「パラダイムの混乱」（paradigmatic confusion）の典型的な例といえる。学習者がダイナミックな方法で文化に関わり、複雑な文化的アイデンティティの形成を理解し、マインドフルな異文化コミュニケーションを生み出せるようにするという構成主義的な目標をかかげながら、このトピックを、明らかに実証主義的なメタファーである「氷山」で紹介してしまうと、学習者の文化に対する理解は単純なものに留まってしまう。これは自ら墓穴を掘るようなことであると Bennett はいう。そして、自らが長年使用してきた文化のメタファーとして「川」を挙げ、川岸を削るけれども、川岸に制約されるものでもあるという川のたとえが、境界条件の「共－個体発生的」（co-ontogenic）な構築を表すと述べている。

以上を整理すると、氷山メタファーを使って特定の国の文化の「特徴」とされる様々な要素をリストアップした目録を作ることは（たとえば日本なら客観文化に和食・神社・温泉・書道、主観文化に集団主義・上下関係・会話表現における婉曲性・少ないアイコンタクトなどをリストアップする）、その国やそこに住む人々が、リストにあるような特徴を「持つ」ものとして文化を物象化し、実体化する。物象化は本質主義的な理解を、そして氷山の見えない部分での衝突を強調することは異文化接触のリスクへの警戒心を、それぞれ助長してきた。したがって、その観点を採用したパラダイムでの現実知覚を続ける限りは、異文化コミュニケーションの教育者・研究者が望んでいるような効果を得ることができない。ゆえにパラダイムの混乱を避けるべく、氷山メタファーの使用をやめるべきということになる。

2.2　異文化コミュニケーション研究者らによる本質主義批判の受け止め

静的なアプローチへの批判について、長谷川（2017）は構築主義、古家（2017）はポストモダンと、それぞれが関連づけながら言及しているように、批判の背景にはパラダイムの変遷が関わっている。長谷川は、Hall が類型化した文化比較の鍵概念（高コンテクスト／低コンテク

ストやＰタイム／Ｍタイム）が本質主義的であるとの批判にさらされていると述べ、構築主義研究者らが構築主義以前の研究を本質主義的であると見なす論考のあることを指して、構築主義に立脚しない研究を全て本質主義的で「劣った」研究として断罪するような姿勢に危機感をあらわしている。長谷川は、質問紙調査によってある時点での集団内の様子を集約してつかみ取る意味での「本質」の探究を試みる研究も、集団の成員間での文化や概念の生成や維持方法の解明を目指す研究も、どちらもが必要な研究といえ、異なるアプローチを同時に可能性として受け入れるような柔軟かつ大胆な姿勢が必要ではないかとしている。

古家（2017）は異文化コミュニケーションを本質主義とする批判をめぐり、その多くがポストモダン言説の影響を受けているとした上で、重要なことを２点挙げている。ひとつは、グローバル化によって人々の間に共通項が増加してもなお感じられる文化差に焦点を当てた分析を行うことである。もうひとつは、これまでの類型化に対して、個人や集団が構築した現実世界を妥当に分析し、現代社会が抱えている諸問題に対する有効な提言を生み出す解釈を与えることである。

小坂（2009）もまた、パラダイム転換によって文化のとらえ方が静的なアプローチから動的なアプローチへと変化したことに触れている。小坂は、ある時代の研究を総称してすべてを本質主義であると見なすべきではないとして、誤解を与える恐れがあるからという理由で個人主義や集団主義、高コンテクストや低コンテクストを教育の場で紹介しないのは逆に誤りではないかと疑問を投げかけている。

これらの受け止め方からわかるのは、異文化コミュニケーションで使用されてきた主要な概念が、あるパラダイムで捉えると静的で本質主義的と批判されるとしても、異文化コミュニケーション教育の目的というコンテクストに照らして判断する場合においては、その意義を失うものではないという考え方である。一方で、異文化コミュニケーションに関わる多くの教育者・研究者がこの立場を取るとしても、なお、Bennett（2013）の指摘した「パラダイムの混乱」によって、学習者が本質主義的な理解に留まってしまう可能性は十分にある。パラダイムの混乱をきたさないようにするには、異文化コミュニケーション教育で活用してきた概念やメタファーなどに対する考え方をパラダイムの観点から整理し直す必要がある。

３　研究の目的

以上の問題意識に基づき本研究では、異文化コミュニケーション教育に関わる考え方をパラダイムとの関連から整理することを第１の目的とする。次に、集団主義と個人主義や高コンテクストと低コンテクストなどといった概念が本質主義的と見なされるのは概念の物象化、つまり、カテゴリーの硬直化と実体化によるものとして、カテゴリーをどう捉えるかに関する考え方を、各パラダイムに関連づけながら整理することを第２の目的とする。そして、静的ではなく動態的なアプローチを異文化コミュニケーション教育の中でどのように活用できるかについて、構成主義の立場から考察することを第３の目的とする。具体的には、１）メタファーの活用、２）異文化感受性の発達、および、３）「異」のカテゴリー化の３点について検討する中

から、構成主義的な発想を異文化コミュニケーション教育にどのように活かせるかを提案したい。

これらの目的のための理論的枠組みとして、異文化コミュニケーションを構成主義のパラダイムから捉えるということを1980年代から一貫して行ってきたMilton Bennettの知見を援用する。Bennetにはこれまで、異文化感受性発達モデル（1986; 1993; 2013; 2017a）をはじめとする数多くの構成主義に基づく研究がある。中でも、異文化コミュニケーションにおける理論的前提をパラダイムから捉えることをテーマにした論文（Bennett, 2005; 2012; 2017b）では、より直接的に、科学的パラダイムと異文化コミュニケーションの関係に踏み込み、整理を行っている。したがって本研究では、Bennettのこれまでの研究を理論的枠組みとして活用することを通して、構成主義的なアプローチを異文化コミュニケーション教育で活用する方法を模索したい。

4　異文化コミュニケーションと３つのパラダイム

4.1　Bennettによる３つのパラダイムの論考

Bennett（2005; 2012; 2017b）は、社会科学における実証主義、相対主義、構成主義を、それぞれ、物理学におけるニュートン力学、アインシュタイン物理学、量子力学の科学的パラダイムに対応づけ、そこから異文化コミュニケーションの問題を整理して、教育の場における「パラダイム的混乱」を解消しようとしている。Bennett（2012）の論考に基づいて、３つのパラダイムの概要、および、その異文化間理論への示唆と異文化間学習への示唆を表１にまとめる。

表１「３つのパラダイムとその異文化間理論と学習への示唆」

パラダイム	実証主義 （ニュートン力学）	相対主義 （アインシュタイン物理学）	構成主義 （量子力学）
概要	ニュートンから始まった科学的な世界観。人間の状態を客観化して、ミクロ（個人）とマクロ（制度）の両面において原因と結果、予測と制御の観点から、人の状態を世界の他の物体と同様に研究することを可能にした。線形因果関係（原因と結果の一方向的な関係）、および、観測者の観察とは無関係に存在する客観的な世界の客観的観測があり、同様の能力があれば全ての観測者は同じように事象を観測できることを前提とする。	任意の観測は必然的に「準拠枠（基準系）」によって制限されることを前提とする。全ては観察者と観察された側の双方のコンテクストに相対的なものとして理解されなくてはならない。社会科学では相互作用を通して互いを定義するというシステム理論の見方によく表わされている。しかしポスト構造主義的な相対性の仮定が、準拠枠を世界観のような「もの」と見なし、知覚を拘束すると、物象化が起こり、硬直的になる。また人類学で文化を相対主義的に定義することは、社会進化論の絶対主義的な概念に対抗する試みであったが、文化を対比させ比較する方法を排除しつつ、他の文化を知る唯一の方法は、その文化への同化や再社会化であることを暗示することにつながった。	構成主義は量子論の科学的パラダイムを社会科学に適用している。Kuhn(1962) による観察者・観察者の理論・研究装置そのものがパースペクティブの表現であり、それを用いて行った全ての実験結果もまた同じパースペクティブの表現であるということから、人の視点が人の記述する現実を構成していると考えられている。現実の異なる見方を記述する相対主義と異なり、観察者は現実がその視点に沿って整理されるように、自分の視点を介して現実と対話する。量子物理学における「不確定性原理」の見解においては、現実は「予言の自己成就」の性質を帯びるため、人の視点が予言となり、人の観察する全てのものと人の視点との相互作用とが、予期を実現させるメカニズムとなると考える。

パラダイム	実証主義 （ニュートン力学）	相対主義 （アインシュタイン物理学）	構成主義 （量子力学）
異文化間理論への示唆	「文化の氷山」の比喩。「明示的な文化」が水上に見えているのに対し、「暗黙の文化」は水中の見えないところで危険に潜んでいる。文化とは、それについて知ることにより、衝突をうまく避けるべきものとして認識される。「物象化」（Burger and Luyckmann, 1966）により文化が本質主義化される。	相対主義は異文化コミュニケーションなどの理論の中心にある。システム理論に負うところが大きく、普遍的な法則ではなく複雑なシステムの中で人の役割やルールがどのように相互作用しているかを記述する。文化をシステムとして定義し、その中で人々が生み出す意味を文化的な構成要素として捉える。言語使用、非言語行動、コミュニケーションスタイル、認知スタイル、文化的価値観など、ある特定の要素のセットによる影響を受けた人々が、別の要素のセットに影響を受けた人々をどのように理解し、また理解されようとするかを説明する。	「文化」をある境界条件における人の相互作用によって生成された行動パターンの記述とみなす。「文化的行動」（Maturana & Varela, 1992）とは社会環境の中での相互作用により維持されている現実の組織化の継続的な顕在化を指す。文化は、社会的行動に参加するという生きた経験の結果であり、経験の一部は、私たちの経験についての「言語化」であり、「文化」と呼ぶ私たちの生きた経験についての説明を生成している。人は世界観を持つのではなく、世界観を構築している。自己再帰的な意識を使って代替文化を構築し、代替経験にシフトする能力こそが異文化適応の核心であり、二人の人間がこれを行うとき、異文化間学習の起こる相互作用空間、「仮想的な第三文化」を生み出している。
異文化間学習への示唆	留学プログラムにおいて、学生に当該地域の文化における制度、習慣、モラル、非言語行動、コミュニケーションスタイル、文化的価値観などの情報を与える。これらは異文化間能力として有用ではあるが、それ自体が能力を構成するものではない。情報を有益なものとするには、情報をどう使うかを知ることがより重要である。	異文化間関係の実践者はごく自然に相対主義的なパラダイムを使っており、「良い悪いはなく、ただ異なるだけ」という言い方をする傾向がある。それはコンテクストの外側から現象を判断することはできないことを暗示し、植民地主義の荒廃からの保護という意味ではよいが、単純化されているという限界がある。より洗練された方法として、文化が「パースペクティブ」を彩っていると表現して「色眼鏡」の比喩の使うことも多い。しかし、実証主義的な概念に相対論的なものを重ねただけになると、「自分の色眼鏡を脇に置く」ことで、文化によって様々に歪めて見ているものの根底にある真の世界を明らかにすることができるという発想になってしまう。また、パースペクティブを認識するだけでパースペクティブをシフトする能力が得られるという考えは、一般的に正しくないだけではなく、相対論的には理論的に不可能になる。パースペクティブを教えることに問題はないが、構成主義的な思考での補強が必要である。	文化の自己再帰的な定義の必要性が指摘される。どのような文化の定義であっても、定義するという人間の活動を定義していることを考慮に入れることが必要である。異なる経験とは、人がどのように現実を異なるやり方で整理するかによるものゆえに、人々が異文化の経験にアクセスできる唯一の方法は、自分のやり方で現実を整理するのではなく、他の文化のやり方で現実を整理することである。構成主義のパラダイムは、私たちが現実を最初に教えられたものとは異なるように経験することができない無力さとしてエスノセントリズムを理解することを可能にしている。構成主義パラダイムによって、異なる現実を想像し、その現実での経験がどのように異なるかを想像し、その異質な経験をある程度イナクト（注：行動や言葉の形に生み出す）することができるようになる。

Bennett, M.（2012）に基づいて著者が作成。注は著者による。

4.2　３つのパラダイムにおけるカテゴリーと異文化コミュニケーション教育

この節では、最初にカテゴリーの成立について述べる。その上で表１に基づき、実証主義、相対主義、構成主義の3つのパラダイムにおけるカテゴリーの捉え方を異文化コミュニケーション教育に関連づけながら考察する。

4.2.1　カテゴリーの成立

カテゴリーの成立とは、ほかと比較すると相違点を知覚することができ、同時に、内部だけで見ると共通点を知覚することのできる範囲を限定することによって起こる。言語学における「分節」、あるいは、ゲシュタルト心理学における「図地分化」、つまり環境を焦点化して知覚する「図」と背景化して注意を向けない「地」に分けることを行うとき、カテゴリー化が起きている。そのようにして、パーツ（部分）を全体から切り出してひとつの構成要素にすることがカテゴリー化であるといういい方もできる。

カテゴリー化しているときは一般化もしている。様々な概念とは、図地分化や分節でカテゴリー化し、注目できるようにした対象のカテゴリーがどのようなものであるかを言いあらわす一般化によってつくられている。たとえば流行語を例にして考えるとわかりやすく、ある現象に多くの人が注目し始めたものの、その現象を言い表す言葉が存在しないというときには、カテゴリー化と一般化によって、一言で言える名前がつけられる（たとえば2018年の「インスタ映え」）。流行語のようにごく最近つくられたカテゴリーには、人が手を加えて生成した操作感を実感することのできるかたわらで、もっと以前につくられた概念になると、つくったことを忘れて物象化し、自明視しやすくなる。

「文化」や「集団主義／個人主義」、「高コンテクスト／低コンテクスト」といった概念とは研究者のつくった概念カテゴリーであり、「国」や「人種」、「民族」とはある特定の次元での比較や検討の意図をもってつくられた単位としての集団カテゴリーである。以下では表１に基づいて、３つのパラダイムがカテゴリーをどのように扱っているか、それが異文化コミュニケーション教育における異文化体験の考え方にどのように反映されているかを見ていく。

4.2.2　実証主義

実証主義においてカテゴリーとは、客観的に観測することのできる対象である。カテゴリーを自明視する実証主義のパラダイムでは、異文化コミュニケーション教育においても、カテゴリーに関する情報を知識として得ることが重視される。

カテゴリーを実体視するとき、経験とは、ある事象が発生したときにその事象の周辺にいることであるとして見なされる。したがって、異文化体験に必要なのはその事象の起こる場所にいることであり、それが留学プログラムの場合であれば、学生を物理的に他の文化的文脈の中に置くことを目的とする（Bennett, 2012）。

4.2.3　相対主義

相対主義が重視されるようになった歴史的背景には、19世紀から20世紀にかけての植民地政策や帝国主義における社会進化論と社会ダーウィニズムの広がりがあった。社会ダーウィニズムとは強くて優れた者だけが生き残りその他は淘汰されて当然とする適者生存論で、ナチズムや優生学を正当化する概念として使われた。ヨーロッパやアメリカが文明先進国として優越的に位置づけられ、その他の国々は、「非文明的」で「未開」と見なされた時代に、人類学者らの示した相対主義は、全ての文化は優劣において判断されるものではなく対等であると主張す

る上での対立概念として有益であったといえる。異文化コミュニケーションもこの流れを汲んで相対主義的な態度を養うことを目的としてきた（Bennett, 2012）。

相対主義においてカテゴリーは、観察を制限する準拠枠として働く（Bennett, 2012）。システム内のことはシステムの内側からでしか理解できないとするならば、文化をそのまま単純に比較することは不適切なことになる。ゆえにカテゴリーには相対化が必要と主張するのがこのパラダイムの特徴であり、それが文化を優劣によって序列づけた考えを封じることに役立ったといえる。Bennett（2017b）は相対主義的な態度が異文化コミュニケーション能力として重要であると考えており、人々は出来事を相対主義的に別の文化に関連づけて解釈できるようになる必要があると述べている。つまりこのパラダイムにおいては、他のカテゴリーに関する知識を単に知るというよりは、相対化した視点で知識を得られるようになるということが重視される。

異文化体験のための方法としては、他の文化のことはその文化の枠組みの中でしか理解できないとして、「違い」を「間違い」とせず、異質性に寛容になり、違いを違いのままで尊重することを重視する。しかし他の文化（カテゴリー）のことは他の文化（カテゴリー）に所属する人にしかわからないとする尊重の姿勢は、「よそはよそ、うちはうち」と互いが不干渉になる個別主義や、「当事者にしかわからないことに意見をするな／意見することができない」と介入できない不可侵性につながりかねない。こういった姿勢は多文化組織や多文化社会などで新しい合意形成や協働の形を生み出す上での制約となり得る。

Bennett（2012）は、異文化間の理論を考える上で相対論やシステム論を用いることに限界があるのは、人がコンテクスト間を移動しながら他のコンテクストを観測することや、観測者が観測のためのシステムを切り替えることを仮定していないからであると指摘している。システム論はカテゴリーを単体で存在するものとは見なさず、全体とつながりのある動態的なものとして捉えてはいるものの、カテゴリー自体に関しては所与のものとして扱っているといえる。観測するためのシステムを切り替えると図地分化する際の図と地の境界は変わり、カテゴリー化も変わるが、相対主義のパラダイムではその部分でのダイナミズムが十分に補えないということになる。

4.2.4　構成主義

構成主義（constructivism）は特定の一人の理論を基にしているのではなく、基本前提を共有する多くの人の考えによって構成されており、そこに線引きをするのは困難である（久保田, 2000）[4]。表 1 において Bennett が言及している構成主義とは、量子論の科学的パラダイムを社会科学に適用することで生まれた構成主義である。Bennett は、観察者・観察者の理論・研究装置そのものとはいずれも基本的に一つの観点（パースペクティブ）の表現であり、この観点で行われたすべての実験の結果もまた同じ観点を表現しているという Kuhn（1962）の言葉を引いて、このような観察する側とされる側との相互作用は量子物理学者によって実証されていると述べている。

実証主義では観察者を実験の外側にいて客観的な事実だけを測定する透明な立場と見なす

が、量子力学では量子のふるまいは観測によって決まるとして、観察者の関与を考慮に入れる。直接見ることのできない超ミクロの量子世界を観測するには、実験の設定方法を変えながら観測せざるを得ず、量子世界からすると超巨大でマクロな存在である人や測定機器が関わる以上は、観察者が干渉してはたらきかけている立場であることを認めた上で、それを含めての観測や結果を記述するよりほかはない（並木 , 1994）とする考え方もある。観察者は自分の視点を介して現実と相互作用しており、現実はその視点に従って組織化されるという、量子力学的な構成主義の立場は、単に異なる現実観を記述するに留まる相対主義的な立場とも明らかに異なる（Bennett, 2012）。カテゴリーもまた、観察／観測（observation）する者の視点によってつくられると同時に、視点として人々の現実知覚に作用するといえる。したがって知識を得ることについても、相対化した視点で知識を得ることができるということのほかに、さらに、特定の視点を使って観察したときに見えてくることを「知識として採用していることに意識的になれる」という、メタレベルでの気づきが含まれるであろう。

量子力学では、広がっていた「可能性の波」の状態から量子がどの状態へと収束するかの確率には、人の意識のはたらきが関わると考えられている（Penrose, 1994）。このような不確定性原理の見解において、現実は「予言の自己成就」（self-fulfilling prophecy）の性質を帯び、人の視点が予言となり、人の観察する全てのものと人の視点との相互作用とが、予期を実現させるメカニズムとなることを Bennett（2012; 2017a）は強調している。異文化体験においても、ある人の視点が、ある特定の観点から組織化した現実の形をもたらすことによって、それがその人の経験に浸透して内在化すると考える（Bennett, 2017b）。それは単に注意を向けている部分を選択的に知覚しているということではない（Bennett, 2012）。すなわち、予期に基づく図地分化で現実世界そのものが形作られ、それをリアルなものとして知覚している。

ある観点を採用していることが予言の自己成就として作用することは、異文化体験の文脈で以下の示唆を与える。まず、人が環境において特定の立場で関わっているとき、ある特定の観点や「まなざし」を使って図地分化することは、ひとつながりの全体からある特定のカテゴリーを焦点化して可視化する。そのカテゴリーを起点に次に起こることを予測するならば、自ずとそのカテゴリーの想定の範囲内でのシミュレーションが行われるため、それに乗っ取った展開を思い描くことになる。それが予言の自己成就につながるのであるが、それゆえに Bennett（2017）は、異文化をより身近に感じられるようにしたいと思うなら、異文化の人々と同じように世界を経験できるようなカテゴリーを生成する必要があると述べている。つまり、異なる分節や図地分化を理解して、その感覚で現実を組織化することによってこそ異文化を経験できるということであり、それが Bennett の定義するエンパシー（共感 , empathy, Bennett, 1986; 2013; 2014; 2017a）でもある。

相対主義とは異なり、構成主義のパラダイムでは、観測者が観測のためのシステムを切り替えることを仮定することができると Bennett（2012）はいう。したがって、異文化体験に関しても、人がコンテクスト間をシフト（移動）しながら他のコンテクストを観測することができるようになるところに注目している。このシフトを可能にするエンパシーとは、認知的なものではなく、「生きた経験の組織化を変えること」（Bennett, 2012, p. 109, 著者訳）である。この

ように、異なる文化で人々が現実を組織化するのと同様の視点を取得して、その同じ感覚で知覚した観察／観測による現実の組織化を体現できるようになることを異文化適応としてBennett は考えている。したがって、異なる言語を用いた経験も、単にその言語が話せるというよりは、その言語使用によって生み出されるローカルな感覚を共有することができるという意味になり、現実の組織化をローカルな方法で行うということになる。異文化コミュニケーション教育でエンパシーを重視すること自体は珍しくはないが、Bennett の考え方は、相対主義パラダイムでは扱えないダイナミズムを構成主義的に活用するための示唆に富んでいる。

5　異文化コミュニケーション教育における構成主義パラダイムの活用

これまで整理してきたことに基づき、以下では構成主義パラダイムを異文化コミュニケーション教育でどのように活用することができるかを検討する。最初にカテゴリーやカテゴリー化に対する構成主義的なアプローチとして、「観察／観測カテゴリー」（observational category, Bennett, 2017b; 2020）という考え方を示す。次にメタファーの活用法を模索する。そして最後に、DMIS を知覚カテゴリーとの関わり方という観点から検討することを通して、異文化感受性の発達を異文化コミュニケーション教育に取り入れることを考える。

5.1　観察／観測カテゴリー

カテゴリーへの構成主義的なアプローチとして、Bennett（2017b; 2020）は、「観察／観測カテゴリー」（observational category）という考え方を提案している。英語の“observe”は、日本語では「観察」とも「観測」とも訳すことができ、両者は異なる行動を示すため、観察と観測を併記する。感覚器官は全体を「観察」するのに対し、カテゴリーを使って図地分化する知覚は、視点をある位置で固定した上で、そのカテゴリーの定める対象を図として見る方の「観測」をしている。ただ注意深く見る観察にとどまらず、ある特定のカテゴリーで分析・測定・予測をする意図のあるときは「観測カテゴリー」とする方が適切といえる。

カテゴリーは観察者が行為者として観察する視点を反映している。つまり、カテゴリーは視点となって全体性の中から部分を切り出し、その観点で見ている間、動きの中で常に変化しつつある現象のあらわれやゆらぎを一時的に囲い込んで止めているといえる。しかし、そのことに意識を向けずにいると物象化する。したがって、観察／観測している感覚を強調するために利用できるのが、観察／観測カテゴリーという発想といえる。

Bennett は観察／観測カテゴリーのことを「構成されたエティック・カテゴリー」（Bennett, 2020, p. 617）であるとしている。Bennett によると、異文化コミュニケーションが注目しているのは文化でもなければ、その文化集団を形成する個人でもなく、異なる文化的世界観を形成する人びとの「間」に生じる相互作用（コミュニケーション）であり、それを理解するのに有用な情報をもたらすのが観察／観測カテゴリーとしてのエティックなカテゴリーである。エティック（etic）的なカテゴリーとは外部者の科学的な観察に基づき意図的に構築されたカテゴリーのことで、内部者の視点を取るイーミック（emic）的な記述が行動をある文化に固有の

ものとして説明するのとは対照的に、パターンとしての行動を観察し、イーミックな記述だけでは実現できない文化間の比較を可能にする（Bennett, 2020）。個人主義や集団主義、あるいは、高コンテクストや低コンテクストといった概念も、人間関係やコミュニケーションにパターンを見出すことによって、エティック的につくられた観測カテゴリーといえる。

本質主義的との批判にさらされたHallによる異文化コミュニケーションの鍵概念（長谷川，2017）ではあったが、Bennett（2017b）はHallの「高コンテクスト／低コンテクスト」などの概念の用い方を構成主義的なものとして、次のように再解釈している。すなわち、Hallが行ったのは、「『違いが違いをもたらす』ことをあらわすような知覚カテゴリーを構築すること」（p. 312, 著者訳）、つまり、文化的な違いがコミュニケーションに違いをもたらすことを示すカテゴリーの構築であり、これによってHallは、純粋な文化相対主義による行き詰まりとステレオタイプ化による単純化の両方を回避することができた。焦点化させる部分を、文化的集団の本質から、集団の中で人々が意味を調整する方法へとシフトさせることができたのである。Hallが主張したのは文化や人そのものが高コンテクストや低コンテクストであるということではなく、人が何を意味しているかを理解し、異なる文化的文脈の中で意味のある発話をするためにはこの区別が重要になるということであったとBennettは述べている。

構成主義的に言えば、パターンは発見されるものではなく、観察者が何らかの目的のために構成したものである（Bennett, 2020）。その意味において、「集団主義／個人主義」や「高コンテクスト／低コンテクスト」といった概念は、比較する対象がいるときにのみ可視化する行動や価値観のパターンを分類して可視化することを目的とすることによって、構成主義的に活用される。さらにいうと、このような概念のみならず、カテゴリーは全て、世界をその視点で切り取る役割を果たすと考えることが、構成主義的な発想をする上で役に立つ。現象を読み解いているときはいつでも、観察／観測カテゴリーを用いていることを忘れないようにしたい。

ではそれを異文化コミュニケーション教育でいかにして行うかが次の課題となる。何かの概念（というカテゴリー）も、国／地域／民族／職業といった集団単位（というカテゴリー）も、特定の観点によってつくられたカテゴリーである。物象化やステレオタイプ化を回避するには、自らがカテゴリー化していることと、カテゴリーを一般化した知識を利用していることに意識的になる必要がある。物象化やステレオタイプ化させないカテゴリーの利用法を知ることこそが異文化コミュニケーションにおいて重要なことといえる。

したがって、異文化コミュニケーション教育においては、自他を分かつ境界やカテゴリー化を自らが操作している感覚をつかめるようにして、人が単なるカテゴリーの利用者ではなく、カテゴリーの生成者として現実に関わっている感覚を育てることが重要といえる。そして、自明視していたカテゴリーも、解除できる存在であることを知る必要がある。そのためには、カテゴリー化が恣意的で任意的なものであることを理解することや、自己理解や他者理解の多くが社会的カテゴリーとそれに付随したステレオタイプによる単純な理解から始まっていることへの気づきが必要といえる。この学習には、構成主義を概念的に学ぶことのほかに、図地分化の任意性や学習性を感覚レベルから学び、異なる言語圏や文化圏のみならず、異なる立場や異なる文脈には異なる感覚で図地分化した現実知覚のあることを学ぶことが有効であろう。

自らがカテゴリー化に関わり操作していることを理解し、カテゴリー化を柔軟にしていくためには、石黒（2016）の提唱するコンテクスト・シフティングも役立つ。コンテクスト・シフティングでは、カテゴリー化のスケール感を「ミクロ－メゾ－マクロ」のレベルで変化させられることや、状況設定を変えると意識の上で前景化するコンテクストも入れ替わること、そしてコンテクストが変わると何がリアルで現実味あることとして知覚されるかが変わることを学ぶことができる（山本, 2019）。本質主義やステレオタイプになるのを恐れ、概念や集団単位などのカテゴリーを利用しないよりも、物象化に気づくこと、カテゴリー化の境界に柔軟性を取り戻すこと、そしてカテゴリー化の操作をしている主体を意識した上で利用できるようになることの方が大事といえる。さらにこれを通して、知覚構造を複雑にし、代替的なカテゴリーを用いた新たな解釈や第三文化などの新しいカテゴリーを創出する相互構成の可能性に気づいていくことの方が、より重要といえるのではないであろうか。

5.2　メタファーの活用

メタファー（隠喩）とは「～のような」という明示的な言い方をしないたとえのことで、たとえば「ガラスの天井」（glass ceiling）のメタファーは、組織の構造に目に見えないガラスの天井があるかのように、女性や有色人種などマイノリティの立場に位置づけられる人びとが一定以上の地位に昇進できないことをあらわす。「ガラスのような心」のたとえはメタファーでなく、「シミリ」（直喩）と呼ばれる。「ガラスのような心」はもろくて壊れやすいことを直接的に示唆するが、「ガラスの天井」のようなメタファーには、着眼点を変えさせて、構造レベルから見える世界を再構成・再構築する力がある。理解の仕方に対して知覚レベルで影響を与え、見えるもののあらわれを変えることから、メタファーを用いることは構成主義的なアプローチの学習として有効といえる。そこで、ここでは最初に文化の氷山メタファーへの代替案として Bennett の提案した「川」のメタファーを取り上げ、川メタファーのあらわす文化観を説明する。またこのほかにも水を用いたメタファーを有効に活用し、構成主義的な発想を異文化コミュニケーション教育に取り入れることについて考える。最後に、氷山メタファーと川メタファーを併用する可能性についても検討する。

5.2.1　川メタファー

Bennett は文化を何かにたとえるとするなら氷山よりも川の方がよいと述べている。

> 文化を何かにたとえるなら、川にたとえる方がよいだろう。川では水が常に流れている。それは決して個々の水の分子なのではなく、同じ構成から成る水が川岸による制約を受けているのであり、またそれと同時に、水がゆっくりと様々な方法でその川岸を刻んでいるのである。川は時間とともに変化するが、ある瞬間にはかなり安定している。川について言えることの多くは、文化について言えることと似ている。氷山にぶつかるよりも、川を旅することの方が魅力的なアイデアに思える。
>
> Bennett（2014）. pp.18-19, 著者による翻訳

川では、水の流れが大地に作用してその土地を削る一方で、削られたできた形が水の動きを制御して、川をその形で流れるように導いている。他方で、川を観察する者の目には、川が渓谷や小川のように、形あるものとして見えている。川メタファーはこれらのことを文化になぞらえている。このことは、互いが互いにとっての環境となる意味において、環境と人との相互構成（山本, 2011; 西阪, 1997）や相互適応（Bennett, 2017a; 2019）を描くと考えることができる。環境からの制約を受ける中での個々の人々の調整が一定の行動パターンに収束し、その集合的に習慣化した形が、ある時点において安定した形状で観察されるとしても、行為は常に環境に作用して影響を及ぼし続けている。文化を何かにたとえる際に、水が結晶化して固まりとなった氷山に対し、環境との相互作用の中で動き、変化しつづける川を用いることによって、文化の見方を構成主義的に変えることができるといえる。

構成主義では全てを人が構成しているという立場から物象化を遠ざけている。観察者の視点と相互作用することが観察される対象のあらわれを引き起こし、その知覚を現実として経験することが人々の世界観を構築するという見解において、「文化」とは、ある境界条件における人の相互作用によって生成された行動パターンの記述にしか過ぎないと Bennett（2012）は述べている。たとえば、「日本文化」とは、地理的な国民国家によるグループ化で設定した境界条件の中での人々の相互作用（およびその産物である制度など）のパターンを記述したものであるとしている。

Bennett によるこの文化観は Maturana & Varela（1992）の「文化的行動」に依拠したものである。Maturana & Varela による構成主義的な認識論では、認識とは認識者によるアクションであり、知ることは知る人の構造にかかっている。Bennett は Maturana & Varela による以下の定義を、文化の概念を理解するのに適した彼ら独自の構成主義からの提案であるとしている。そして、この見解における文化的行動を、社会的環境の中での相互作用によって維持される、現実の組織化の進行中の発現として解釈している。

> 文化的行動とは、ある社会環境のコミュニケーション的ダイナミクス内部において、新しいメンバーが個体発生的に獲得した行動パターンが、世代を超えて安定したもの、を意味する（p. 242）。
>
> ウンベルト・マトゥラーナ＆フランシスコ・バレーラ（1997）『知恵の樹―生きている世界はどのようにして生まれるのか―』菅　啓次郎（訳）ちくま学芸文庫

ベネットの川メタファーもまた、Maturana & Varela の神経生物学的な進化の観点から着想されている[5]。Maturana & Varela の場合は、丘の上に垂らした滴が地表に落下して下方へと向かうときの軌跡が描く水のルートを、適応による生物の進化の樹形図のたとえとして用いている。垂らした滴の流れ方は、まっすぐなときもあれば、障害にぶつかって方向を変えたり、風によって曲がりくねった動きをしたり、先行した滴の残した跡が地表に影響して不確定性を加えたりもする。丘の上を流れる水滴は自らの構造的な性質の働きのままに動いていき、しかし

その動きは地球の重力や地表や風、さらには不確定性からの影響によって抑制されるため、その都度の互いの相互作用の結果として、自然任せの成り行き模様（ナチュラル・ドリフト）を様々に見せるとされている。

相互作用する中からつくられるのは、水なら流れのパターン、人なら行動パターンであり、その産物としての流れは「川の形」をつくり、行動パターンは系統立てられて「制度」になる。そうすると、人も水もその形（川の形・制度）に導かれ、制限されながら、決まった動きをするようになる。川の様子をある特定の位置から観察すると、V字谷のような深い谷を流れる川、蛇行した川、浅くて穏やかな川など、境界を設けて区切った範囲内には特徴的な川の形というものが見えてくる。文化も同様に、あるコミュニティをカテゴリー化して範囲を定めて観察しているからこそ、集合的な行動パターンの形を見出すことができる。

文化を行動パターンであるとするアプローチは、人と環境（自然環境と社会環境）との相互作用をゲーム論的に、あるいは、生態学的に捉える文化心理学者にも共通する。たとえば山岸（2010）は、心理面と社会面の相互規定的な関係の中に、人びとの相互作用において均衡化された反応パターンの生じることを「制度」として捉えている。制度というと一般的に想起されるのは、文章にして取りまとめられた決まり事や規範であろうが、ここでの制度とは、「人々が集合的に維持している反応のパターン」（p. 18）であり、人々は自分の行動に対する制度としての一群の他者からの反応を予測しながら行動することで生み出される一定のパターン（制度）に従い行動することによって、それ自体が、その制度を生きる人々の適応するべき環境を構成する。山岸のいう適応課題とは、社会的環境のもとで生じる様々な適応課題に対応するための適応戦略の集合であって、これは外部に存在するわけでもなければ、外部から一方的に人々が適応をやむなくされているものでもない。「心と文化の相互構成」について、山岸は次のように述べている。

> 人々が特定の戦略を用いてとる行動の分布は、その分布を前提とした他者の反応の予測を可能とする。そして、そこで予測される他者の反応こそが、社会的適応課題そのものとなる。行動の分布が適応課題を生み出し、その課題解決にとって適切な行動を人々がとることで、その課題そのものが再生産される（あるいは、新たな課題が生み出される）。このプロセスが均衡状態を達成している状態では、他者の行動の予測に応じて捉える適応行動が適応課題そのものを生み出し強化するというかたちで、他者の行動の予測の背後にある信念と行動（及び行動が生み出す適応課題＝誘因）の双方が自己維持的に存在することになる（p. 20）。

山岸の取り上げているのは観察可能な行動パターンの背後に抽象化される心的反応のパターンであるが、互いが参照しているであろうことを想定した共通知識に従い行動することを互いに行っているとすれば、それは予言の自己成就をもたらすものとなる。想定（assumption）を再生産して維持し続けることは、自明視され疑われることのない信念を生み出すということにもなる。互いが互いの環境として作用し合う相互構成、相互適応が仮定されていることを、

Bennett、Maturana & Varela、山岸の文化観の共通点として見ることができる。

5.2.2　水によるメタファー

水は、身近であることや、さらに小学校で学んだ水の三態変化のように、氷、水、水蒸気と様々な水分子の状態を思い起こしやすいことから、メタファーとして活用しやすい。水分子が個々に動き回り結合しない気体の状態（水蒸気）からは、個々の人の散らばりを、水分子が結合して結晶化した固体（氷）の状態からは「氷山」のように固定化した静的なイメージを形成することができる。水分子がゆるやかに結びついた液体の状態からは、環境と互いに影響をやりとりしながら集合体としての形を変える川（Bennett による川メタファー）をイメージすることができる。そこからさらに具体的に、川に生じている「流れ」（current）に注目することも可能である。

5.2.2.1　流れのメタファー

「流れ」は日本語の中で様々な使い方をされている。たとえば「話の流れ」というときは文脈としてのコンテクストをあらわしており、話の流れは以前起きたことを引き継いで、その流れの延長線上に話を展開させる。コンテクストを感知して解釈することを感覚的にあらわした「流れを読む」とは、過去の経緯から今までのこと、さらには将来的な展望に至るまでの動きのプロセスを動態的に捉えることである 。「ピッチャーが交替したことで試合の流れが変わった」というのは、勝敗の展望が変わったことを意味しており、「流れが変わる」というときは、その場の支配的なコンテクストが入れ替わることを指している。

流れとは、既に確立した動きやパターンが存在することをあらわすと同時に、その動きやパターンは絶えず動いて変化し続けるという流動性もあらわしている。物象化させやすいカテゴリー化についても、流れの中から入れ替わり立ち替わりして、一瞬だけ川面にあらわれる観察可能な姿として見ると、次の瞬間には輪郭を失い、流れに戻っていくものとしてイメージされる。

社会における行動の選択がパターン化されているところにも「流れ」がある。そこから、流れのもたらす力学が、その流れに乗りやすい人と、困難を伴う人を生み出していることにも注目することができる。山岸（2014）は、意思決定の基準が曖昧で情報が不確定であるなどして、ほかにより良い選択肢を選ぶ動機付けのないときに、自動的に用いることを受け入れている特定の戦略を「デフォルト戦略」と呼んでいる。たとえば「ほめられたら謙遜する」、「事故を起こしたらどちらの責任かが不明でもまず謝る」など、「とりあえずこうしておけば間違いがない」や「この場合は常識的にこれ」といった選択のパターンが該当し、社会に集合的な流れをつくっている。これは観測のためのカテゴリー化を日本社会とした場合であるが、観測する単位と対象、また環境を変えれば、別のデフォルト戦略によって行動が均衡化する。このデフォルト（初期設定）の流れに乗っていられる間は、ただその流れに身を委ねるだけで、自然に過ごすことができる。デフォルト戦略は、「長いものに巻かれろ」や「出る杭は打たれる」といったことわざや昔話によっても日常的に強化されていることから、文化特有に習慣づけられた知覚や認知のあることは、デフォルト戦略が選択されやすくなるための癖づけといった側

面があると山岸は考えている。つまり、社会にも、認知にも、埋め込まれていて、そのことに意識的になることもなく、認知に負荷をかけて思考することもない行動選択がデフォルト戦略ということになる。

あるコンテクストにおける基準であり、「普通」と見なされる無標（unmarked）の立場、あるいは、数の上で多数となるマジョリティや、力の上で優勢な主流派の力学で均衡化したパターンの流れにおいて、これらの立場でいる間は、流れに楽に乗っていることができる。単に流れに運ばれていくだけでもよいし、流れからの推進力を得てその方向へさらに進むこともできるであろう。一方、イレギュラー性が「普通でない」と見なされる有標（marked）の立場、あるいは、マイノリティや非主流派の立場では、この集合的な大きな流れに「自然に」は乗れず、周りと一緒になって流れることは難しい。立ち止まりたくても流れの中では立っていづらいし、別方向へ行こうとしても歩きづらい。目に見えない大きな流れの中で、少しでも立ち止まろうとしたり別の方向へ行こうとしたりすると、それを押し返し、押し流そうとする力の抵抗を受け、「さざ波」が立ったり、「波紋」を呼ぶ。「波風立てるな」と注意されもしかねない。流れに飲み込まれて自分を見失うこともあるかもしれない。

社会的な行動選択にパターンの生じていることを「流れ」として捉えることによって、有標化することやマイノリティの立場になることにともなう「やりづらさ」や「生きづらさ」など、様々な負担感のもたらす「〜づらさ」を集合的な相互作用の動きの中でイメージ化することができる。そこから、特定の社会的アイデンティティを持つがゆえに対処しなければならない物事のある「アイデンティティ付随条件」（Steele, 2010）への対応がどれほどのストレスになるかを想像することもできる。

この「流れ」は変化するものであり、意識的にはたらきかけて変更することのできるものでもある。しかし社会的な行動選択のパターンを物象化して規定路線と見なすと、社会も、人々の選択も、硬直化して閉塞感が生み出される。このような状態は「川の物象化」ともいえる。これをあらわすメタファーとして、次に「流れるプール」を取り上げる。

5.2.2.2　流れるプールのメタファー

水を用いたメタファーとして、結晶化した氷山でもなければ、変化し続ける川でもなく、動態的な「流れ」はあるのに形を変えないことを、「流れるプール」にたとえてみよう。流れるプールとは、静止はしていないが固定的な水の流れであり、ループ状に閉ざされた形の中で、水がぐるぐると同じ方向に流れ続ける。

流れるプールのメタファーは、物象化した文化の固定的なシステム内における動きや閉塞感をあらわすものである。流れるプールの中で無標、あるいは、マジョリティや主流派の立場でいられる限り、流れは自然で自動的に感じられ、明日も今日と同じ流れであることを予測することができる。その閉じたループ内で流れていくことは、無意識のうちに文化を再生産して維持することに似ている。そして、そうやって何も考えずに身を委ねることができて、「普通にしているだけ」、「普段どおりにしているだけ」と思えてしまうことが、無自覚のうちに「構造的差別」（Pincus, 1996）を再生産することや、無感覚の「マイクロアグレッション」（Sue,

2020）の状態に陥らせてしまう。

5.2.3　氷山メタファーと川メタファーの併用

氷山メタファーが実証主義的な表現で、文化的差異をリスクとして捉えることをうながしかねない（Bennett, 2012; 2014）ということは、今後はそれを使用すべきではないことを意味するのであろうか。ここでは氷山メタファーと川メタファーもまた「観察／観測カテゴリー」であるとして、観察者としての人が用いる観点であるところに活路を見出し、構成主義的な利用法を考えてみたい。

結論から述べると、カテゴリー化に意識的になり、観察／観測カテゴリーとして用いるのであれば、両者を併用することは文化を概念的に理解する上で効果的であると考える。２つのメタファーを用いて、観点を変えながら対象の見え方を変えることは、現象の多面的理解につながる。単眼でなく複眼的に見て、多方面からアプローチする思考を習慣づけること自体もまた、構成主義的な異文化コミュニケーション教育といえる。

川メタファーでは川の形と流れの力動の両方を捉えることができ、人々が長い時間をかけて環境と相互作用する中で文化的行動（Maturana & Varela, 1992）を生み出すダイナミズムを、俯瞰して見るまなざしを出現させる。他方で、氷山メタファーは固まりとしての氷山を知覚させ、水上と水面下とに分けるまなざしを出現させる。動いている「川」では注目しにくい部分を、「氷山」ではしっかりと観察することができる。このことによって、文化といえばすぐに思いつくようなものだけが文化ではないことに学習者は気づくことができる。たとえば文化とは何かと言われて思いつくのは、言語・ファッション・料理・スポーツ競技・武道・建造物・漫画・文学・映画・音楽・ダンス・宗教・経済・法律・政治などのように、明文化されていることや、系統立てられ、体制化していること、物理的に形のあることなどがあてはまる「客観文化」であることが多い。一方、価値観・信念・行動規範・慣習などの「主観文化」には、集合的な相互作用のバランスの取り方として、コミュニティごとに通用する基準としての「さじ加減」や「線引き」が暗黙裡に成立しているということは、意識されにくくなっている。

また友情観・結婚観・仕事観・家族観・学歴観など「～観」としてあらわされる価値観や、「～感覚」としてあらわすことのできる金銭感覚・時間感覚などは、個人によって異なる個人差として捉えられていることもある。氷山メタファーは、相互作用の動きを静止させて観察したときに可視化されるパターンが文化の「形」として記録されたものを、主観文化や客観文化の目録（リスト）にして提示することに優れているということができる。

したがって、動態性や相互構成・相互適応を学ぶことのできる川メタファーと、静的な観察を可能にする氷山メタファーを対になるものとして、次の２点に留意しながら相補的に学ぶのであれば、個々の集団やカテゴリーに焦点化した知識習得にも活かすことができると考える。また実証主義的な視点と構成主義的な視点との間で、コンテクスト・シフティングさせながら多面的な文化理解をすることも、異文化コミュニケーション教育において有効といえる。

１）観測する単位（国、職業、民族、世代等）を観察者による任意のカテゴリー化として扱う。

２）概念や分類のためのカテゴリー（集団主義／個人主義等）とは、何かの性質をあらわすものではなく、観察／観測カテゴリーとして作用して、観察者の理解したい部分を可視化させていることに意識的になる。

5.3　異文化感受性の発達

DMIS は、差異にまつわる情報を整理し、自分の世界に関係づけて経験するための知覚構造が、単純な状態から複雑な状態へと洗練されていく過程をあらわしている。前半の「否認―防衛―最小化」は自文化中心主義、「受容―適応―統合」はエスノリラティヴィズムに関連づけられている。エスノリラティヴィズムというのは、自文化中心主義をエスノセントリズムというのに対する Bennett（1986）による造語である。現実を組織化する方法には、自分のやり方の他に数多くの実現可能な選択肢があり、自分の信念や行動というのはそのうちの一つでしかないと考える態度（Bennett, 2012）のことをいう。

モデル全体のくわしい説明については Bennett（1986; 1993: 2013: 2017a）や山本（2014; 2016; 印刷中）を参照することができるので、ここでは概要を図１の「 DMIS におけるカテゴリー知覚の物象化的発達と構成主義的発達」にまとめることによって説明を最小限にとどめたい。図１の最上部に示したのが DMIS である。その下に３つのパラダイムを提示した。これらは情報処理に適用されている主要な観点がどのパラダイムに関連づけられるものであるかを示している。「否認」、「防衛」、「最小化」には「実証主義」、「受容」から「適応」の前期までに「相対主義」、「適応」の後から「統合」には「構成主義」と表記している。これらは、Bennett（2012）が「受容」を相対主義、「適応」と「統合」を構成主義のパラダイムと関連づけて説明していることに対応している。

図１でパラダイムの下に示されているのは、カテゴリーを物象化して与えられたものとする立場と、生成すると考える構成主義での立場の違いを明確にするために置いた仮定である。それによって各段階／局面がどのように解釈できるかを記している。上段にはカテゴリーを物象化して「所与」、すなわち、与えられたものや生来のものとした解釈を記述した。下段には、カテゴリーを「生成」、すなわち、人が関わり構成するとした場合の解釈を記述した。Bennett（2012）は、実証主義と相対主義の立場ではカテゴリーを物象化して扱っていると述べている。したがって、理論的にいうと「統合」はカテゴリーを「生成」すると考える立場にある。しかし物象化の延長線上で解釈した場合の「統合」もあると考えることから、上段にも「統合」の説明を入れてる。これらの解釈についてはのちほどくわしく述べたい。

5.3.1　異文化感受性概念におけるカテゴリーの扱い

素朴な理解として、もし異文化感受性を「A 文化と B 文化の間の差異を知覚する感度の高さ」とするならば、A 文化と B 文化を初めから客観的に分かれてカテゴリー化したものとして、両者の違いを感じ取るのが異文化感受性になる。そのように物象化しているときは、カテゴリーの範囲を確定し、現象を固定化した上で比較をして見ている。しかしそれは、異文化感受性の発達初期の実証主義的な知覚には関わるが、後期までを含めた全体像を描写してはいない。

DMIS の 6 つの段階／局面

自文化中心主義 Ethnocentrism			エスノリラティヴィズム Ethnorelativism		
否認 Denial	防衛 Defense	最小化 Minimization	受容 Acceptance	適応 Adaptation	統合 Integration

実証主義 Positivism

相対主義 Relativism

構成主義 Constructivism

カテゴリーを「所与」とする（上段）

「異」として分節せず、未分化で見ても見えない状態。「異」に対し実感がわかず無感覚。	「我々対彼ら」の二項化させた単純な知覚構造。見ている世界が変わることへの抵抗感。「異」に対し防御的・攻撃的になる。	境界の曖昧化。知覚カテゴリーを一元化してまとめる。「異」を区別することに消極的で、同一視・同類視する。	「自／他」の境界を所与とした上で、各カテゴリーに本質的な違いのあることを前提として、互いの間にある違いを認め、尊重する。	異なる習慣や価値観・行動規範を理解した上で解釈することができる（文化的同化理解）。その解釈に合わせた考え方やふるまいができる。	そのつど異なるカテゴリーに合わせることができる。複数のカテゴリー間を渡り歩いているところに自分らしさ（アイデンティティ）を感じる。
			システム・秩序の違いに基づき情報を分節・図地分化して再構成する。知覚レベルから現実が異なる方法で組織化されることに興味・関心を持ち、尊重する。	異なるシステムで図地分化して秩序立てられた（組織化した）現実への感覚をつかむ。さじ加減がわかる。物理的・想像的参加（エンパシー）による内面化・身体化。	境界生成への主体者意識をもつ。カテゴリーを生成する者としての自己再帰的意識を持った選択とコミットメントによりアイデンティティ形成をする。

カテゴリーを（生成）とする（下段）

図 1　DMIS におけるカテゴリー知覚の物象化的発達と構成主義的発達

Bennett（1986）は、「発達モデルは、理想的には、発達が起こるために内面化されなければならない重要な組織化概念に基づいているものであり、異文化感受性の場合、この概念は『差異』（difference）である」（p. 181）として、特に「文化的差異」に焦点を当てている。より最近では、「差異」の代わりに、自他を分かつことによる違いという意味で「他者性」（otherness）という概念も使われている（Bennett, 2017a）。いずれの場合も、知覚する上で何かを図地分化の「図」としてカテゴリー化し、区別して知覚することに関わっている。その場合に境界条件をどのように設定するかによって、何が違いとしてカテゴリー化され知覚されるかが変化することが仮定されている。この差異を知覚する構造が単純な状態から複雑化する、すなわち、知覚的複雑性（perceptual complexity, Bennett, 2002; 山本 , 印刷中）を増すのであるが、この過程が局面ごとに変化していくことを表わしたのが、モデルにおける 6 つの段階であるといえる。

このようにして境界を設け、対象に対する差異を知覚することについて理解する上では、Bennett（1977）の博士論文における“forming-feeling model”の研究における、“forming is felt and feeling is formed in an ongoing, interactive process”（継続中の相互作用プロセスの中で、形成することが感じられ、感覚が形づくられる , p. 102, 著者訳）という考えにふれておく必要がある。この場合の「形成する」とは、「図と地の分化を生み出す識別や境界の形成を意味する」（Bennett & Castiglioni, p. 181, 著者訳）とされている。このモデルは、全体性から何かを感知することによって、それが図地分化した形を生み出し、その形から感覚を得るのであるが、その感覚が次に何を感知して知覚するかに影響を及ぼすという、環境と知覚の円環的な作用プロセスをあらわすものとして理解することができる。Bennett & Castiglioni（2004）は、「言い換えると、私たちが経験する現実の形は、私たちの分化した図を集めた全体によって記述される」（p. 255, 著者訳）とも述べている。

以上のような構成主義的な観点から、現実知覚に基づく差異の経験を概念化しようとしたのが、異文化感受性であるといえる。それゆえに、何を感知して環境から図地分化させ、選択的に知覚して（あるいは未分化のまま感知せず見過ごして）、境界を設けたことによって形成された「図」に差異性を見いだすか（あるいは同質性を見いだすか）が、異文化感受性の主要な関心事項になっており、その知覚構造で構成された現実性の認識が DMIS における各段階で記述されている。異文化コミュニケーションという文脈において、多くの場合、境界条件の設定は社会的カテゴリーと重なっている。また、自らの現実知覚において、どの程度の複雑さ（あるいは単純さ）によって差異性を知覚し、それに基づく現実の組織化がどのような意味として解釈され、経験（Kelly, 1963）されるのかが、異文化感受性発達の焦点となっている。

さらに構成主義的な感覚を異文化感受性の“inter-cultural”（異文化 - 間）における「間」にも求めることを試みたい。この漢字は「あいだ」と読めば「つなぐ空間」に、「はざま」とも読めば「ギャップのできた空間」になり、A 文化と B 文化という分け方をすることによって生じる「あいだ」や「はざま」を感じ取るとして異文化感受性をイメージすることができる。「はざま」を知覚するとは、ひとつながりであった全体を分けるときの差異化を感じ取ることと言える。「あいだ」を知覚するとは、分けたところにできる間柄やつながりを感じ取ること

であり、差異化によって生じる関係性を感じ取ることとも言える。このように考えると、二つ以上のカテゴリーに分かれる空間での相互作用をイメージすることができる。特定の意図による分け方（e.g. 住民を日本人と外国人に分ける）もあれば、意図とは関わらずコンテクストとの関連性の高さによって、そのときどきに立場が分かれることもある（e.g. 職場だから上司と部下に分かれるが、趣味の面ではテニス仲間になり、新制度の導入に関しては推進派と反対派の立場を取る）。いずれの場合においても、自他のカテゴリーが分かれ合うごとに新たな関係性でつながりあっている。

したがって、この文脈で異文化感受性を定義するなら、分かれつつ、相互に作用し合う空間に、「あいだ」や「はざま」を知覚する感度の高さとすることができる。間柄や関係性というのは、全体を部分的なカテゴリーに分けるところに発生している。DMIS における前半の「否認―防衛―最小化」のポイントになるのはそこに生じる境界の感知の仕方で、「はざま」としてのギャップの知覚に関わる。後半の「受容―適応―統合」のポイントになるのは、分かれつつ相互作用する空間への参加の仕方であり、「あいだ」をつなぐ繊細さに関わる。異文化感受性を「異文化に対する感受性」とはせず、全体性の中に差異として分化するカテゴリー化の知覚の感度として見ると、知覚構造が複雑になるに伴って、分け方と関わり方がどのように変化するかを理解し、それぞれの知覚構造では何が現実性あることとして見え、聞こえているのかが複雑化することに焦点を当てることができる。

5.3.1　カテゴリーとしての６つの段階／局面

DMIS には６つの“stage”があるが、日本語で該当する訳を「段階」とするか、あるいは「局面」とするかによって、可視化される側面の変わるのも、これがカテゴリー化の問題だからである。「段階」と訳すと、より静的に知覚でき、各段階の特徴に注目することのできる一方で、「局面」と訳すと、全体の流れをより動態的に知覚することができ、連続体上の発達におけるある時点に注目する意味合いを強めることができる。たとえば過去の異文化体験の解釈に DMIS を用いるという個人史的な利用法の場合は「局面」として捉える方が適している。以下の説明には「段階」を用いるが、局面ともいえることに留意されたい。

Bennett（2011）自身も、“stage”とは名付けたものの、実際のところこれらは“stage”というよりは連続体上に現れる立場であり、異なる経験の組織化に印をつけているものであると述べている。しかし、各段階のわかりやすい特徴のみがモデルの理論的背景から切り離されて活用されるようになったことで、静的で直線的なモデルという批判が生まれたのではないかと推察できる（山本 , 2018）。また、これらのカテゴリー（段階／局面）を物象化すると「この段階の人はこういう行動をする」という本質主義的な理解になるため、観察／観測カテゴリーとして、差異と自らの世界との関係を可視化して理解するために用いていることに意識的なる必要がある。

5.3.2　カテゴリーを「所与」とする物象化と「生成」とする構成主義による解釈

カテゴリーを物象化して「所与」とした場合、カテゴリーとは過去から続く確固たる存在と

なるため、自己カテゴリーは生来のものか、後天的に獲得したものとして扱われ、所有者意識を伴うことが考えられる。それゆえに各段階を以下のように捉えることができる。「防衛」では、自分のものである自己カテゴリーを守るべく、他者のものに干渉されてできた「差異」を排除しようとし、「最小化」においては、排除できない「差異」を自己カテゴリー内になじませることによって、安定をはかろうとする。カテゴリーを物象化した状態で「受容」すると、自己カテゴリーと他者カテゴリーの間の本質的な違いを認め、尊重する。他者のものであるカテゴリーへ「適応」するとは、そのカテゴリーからの要素を取り入れ、合わせられるようになることを意味する。そして「統合」とは、文脈によって様々に、その場に必要な合わせ方を用いて相互作用することを絶え間なく行うあり方を自分らしさ（アイデンティティ）として確立することを指す。以上がカテゴリーを物象化した解釈での DMIS になる。

カテゴリーを「生成」とする構成主義的な立場は、「適応」の後期と「統合」に関わるものである。しかし図 1 では「受容」にもこの立場での解釈を表記している。その理由は、いったん差異に対する構成主義的な「統合」の関わり方が成立した後では、その他の差異に関しても、その対象が文化として、あるいは、コンテクスト上で差異としてカテゴリー化したものとして知覚される場合は、構成主義的な「受容」で情報処理されると仮定できるからである。ただし、経験盲（Barrett, 2017）になっていて、その対象が未分化の状態にあるときは、環境から分化して知覚することをしておらず、したがって「否認」と同様に、知覚することはないと仮定できる。カテゴリーを知覚したときは、「防衛」のような違和感を覚えるかもしれないが、構成主義的なアプローチで情報処理をする場合には、差異を本質とは見なさず、環境の中のある特定のコンテクストに関連づけられて可視化したカテゴリーとして扱い、差異を差異として成り立たせる現実の組織化に注意を向けていくであろうと推論できる。

構成主義的な「統合」の感覚では、自らを観察者として捉え、「A 文化や B 文化として見ている自分自身が、それらを観察／観測のためにカテゴリー化して用いている」ことへの「メタ意識」（metaconsciousness, ベネット , 印刷中）の行使を自覚することができる。カテゴリー生成者として差異を分化させることへの自分自身の関わりに意識的になれることがポイントである。物象化した「統合」では常に流動的に「合わせる」ということはできても、「閉じ込められた周辺性」（encapsulated marginality）という概念で示されるように、そのような自分自身のことを孤独な存在として認識する。

Janet Bennett（1993）は、二文化的（bicultural）、または、多文化的な状態にある人びとの文化的アイデンティティについて、自己意識が文化間で機能不全に陥る状態になることを「閉じ込められた周辺性」、出来事をメタレベルで捉える経験の仕方によって文化的文脈の間を柔軟に行き来する状態を「構築された周辺性」（constructed marginality）と概念化している。これら2つの周辺性が、ある時期までの DMIS の「統合」に含まれていた。Milton Bennett（2012）は、文化間の境界に陥る（閉じ込められた周辺性のこと）というのは構成主義ではなく客観的な自己の記述であると述べ、現在では「閉じ込められた周辺性」と「構築された周辺性」を「統合」から外している。そして、客観的な自己ではなく構築の過程にある自己の記述をあらわす概念として、「リミナリティ」（liminality, Bennett, 2012; 2017a）という用語を用い

ている。

「閉じ込められた境界性」で疎外感を強く感じるのは、自身が国籍など特定のカテゴリーを使って境界を設けたことに自覚的ではないからであり、カテゴリーを所有物のように扱うがゆえに、特定のカテゴリーに所属する資格は真のメンバーにしか与えられないという理解の仕方になるからであると推論できる。客観的な自己を想定すると、自分らしさ（authenticity）や本当の自分（true self）を求めることにとらわれてしまう（Bennett, 2012）。あたかも「完全な日本人」や「真性のアメリカ人」、「本物のイタリア人」がいるかのような、逆に「部分的な日本人」や「偽物のアメリカ人」、「不十分なイタリア人」というものがあるような錯覚が起こり得る。どちらの規格からも外れ、何人でもないと感じるとき、自身を２つのカテゴリーのはざまにこぼれ落ちた孤独な存在のように認識しているということができる。

5.3.3　異文化感受性の発達と異文化コミュニケーション教育

「リミナリティ」についての詳細はBennettの論文にはほとんど示されていない。だがこれは、成人の儀式をする前の者には若者コミュニティにも成人コミュニティにも属さない期間があり、その間境界的な存在になるという、人類学者のTurner（1969）が提唱したリミナリティの概念に基づいていると推測される。リミナリティもまた、「若者」と「成人」を所与のカテゴリーとしたときに、科学者の目が、どちらの所属でもない状態を観察することを可能にしたカテゴリー化であるとできる。

どちらの所属でもない状態のことを、構成主義的な「統合」の感覚では、以下のように説明できる。まず、「統合」でのアイデンティティは、「自己」の経験を生み出すような方法で出来事を解釈し続ける進行中のプロセスと見なされている（Bennett, 2012）。「自分自身を『一連のアイデンティティを持った人』はなく『プロセス中』の人として経験する」（Bennett, 2017a, p. 111, 著者訳）ということでもある。「プロセス中」（in process）に「移行中」（in shifting）という考え方を加えると、ある状態から別の状態へと移行中の過程にあることを想定しているのが「統合」の感覚であるということができる。それがときに何者でもないような感覚として経験されることもあろうが、基本的には脱構築と再構築を続けており、そうすることによって、何者でもないことを何者にでもなれるという感覚として経験できることが重要であり、そのために大事なこととは、Bennettが「統合」の段階で重視している選択とコミットメントである。様々な葛藤と向き合い、他者を尊重し、異なるコンテクストにエンパシーすることを経た上で、自分にしか決められないことがあるということを覚悟して引き受けることでもあるといえる。

まとめると、異文化感受性の発達を異文化コミュニケーション教育で活用することについて以下のように考えることができる。まず、ある対象が学習者に関係しているにも関わらず、そのことが認識されていない場合には（否認）、カテゴリー化している対象を認識できるようにする。知覚したカテゴリーに違和感や否定的感情が生じているときは（防衛）、二項化したカテゴリーに共通項を求めて再カテゴリー化したり、差異が曖昧化（山本, 2014; 2016）して気にならなくなる工夫をしたりするなどして（最小化）、葛藤の出方を調整していく。ある程度の

安心感を持って対象を知覚できるようになったら、改めて対象をよく観察し、知識を得て、実際どこにどのような差異があるのかをしっかりと確認し、違いを違いとして認められるようにする（受容）。さらに、対象となるカテゴリーでの感覚がわかるようになることや、その感覚で対象と同様の観点から現実を知覚できるようになるエンパシーを学んでいく（適応）。そして、いずれの立場での感覚も尊重されるべきと考えることのできる相対主義の態度を育成することができたら、これらの経験をメタレベルで意識化して捉えながら、異なるカテゴリーとの相互作用に第三文化といえるような新しい代替的選択肢を生み出す「メタ調整」（meta-coordination, Bennett, 2017a）と相互構成が可能であることを感じ取れるようにしていく（統合）。このように、カテゴリー生成者としての主体者意識が「統合」における主要な経験であると仮定すると、多くの葛藤を経験する過程において、自分にしかできない、自らがコミットする判断を選び取ることの重要性を学ぶことができる。

5.4 「異」のカテゴリー化

山本（印刷中）は、異文化コミュニケーションについて語る上で、「異文化」から文化を意図的に外した「異」（difference）をカテゴリー化して表現している。人びとが相互作用する中での関係性やその場の状況など、コンテクストが変化するにつれて関連性（レリヴァンス）の高いことがらが何であるかも変化していくがゆえに、山本は、互いが異なる立場に分かれることによってギャップやズレなどとして知覚されるカテゴリー間の差異を、コンテクスト上にその都度あらわれる知覚対象としての「異」として扱うことを提案している。その目的とは、異文化コミュニケーションとして学べることを、これまでの伝統的な異文化コミュニケーションの射程内にあり文化的集団として扱われてきた社会的カテゴリーの外側へ拡張することにある。

たとえば社会的アイデンティティに対して個人的アイデンティティとみなされるような、個人の志向を境界とする場合のカテゴリー化（オンライン派と対面派、朝型と夜型）や、経験の有無を境界とする場合のカテゴリー化（留学経験者や入院経験者のような何かの経験者に対する未経験者）、体質によるカテゴリー化（アレルギー体質、恋愛体質、頭痛持ちに対するそうでない人たち）、極端にいえば「○○」に対する「非○○」や「○○でない」など、コンテクスト上に関与するどのような非対称性でも「異」として着目できるようにすることで、これらについても異文化コミュニケーションやDMISからの知見を適用できる対象に含めようとしている[6]。

この山本のアプローチによる「異」の捉え方は、西阪（1997）による「異文化性」の議論に通ずるものである。西阪はエスノメソドロジーの観点から、コミュニケーションの参与者間の文化差が当事者間の相互行為の中で志向され、有意味（レリヴァント）になることを「異文化性」のあらわれと呼んでいる。西阪によると、異文化性は相互行為の具体的な展開の中で、その展開を通して達成される。「日本人」と「外国人」のようなカテゴリー対が会話の中で相互行為的に達成されるとき異文化性は立ちあらわれているという見方になる。実践的な目的のためにカテゴリーに結びついた活動をしていて達成されることもあれば、当人たちの意思や思い

と無関係に達成されることもある。

カテゴリー化するとき「異」は生じる。「異」は無標としての集団に生じている「流れ」と相互作用して有標化することでも生じている（山本，印刷中）。この意味において「異」を知覚することもまた文化的行動であるという視点も忘れてはならない。それでもなお、現代の社会において人々の間で様々に生じている非対称性への違和感や葛藤を、異文化コミュニケーションの中で扱えるようにするには、「異」に注目することが有用と考えられる。

6　おわりに

本研究は、異文化コミュニケーションの分野で早期より構成主義的アプローチをとり続けたBennettの研究に理論的枠組を求め、実証主義、相対主義、構成主義のパラダイムと関連づけながら、カテゴリーおよびカテゴリー化の捉え方を考察した。そしてそれに基づいて、構成主義的な発想を異文化コミュニケーション教育に取り入れる方法を模索した。最初にメタファーをとりあげ、文化を動態的にイメージ化しながら、知覚する現実の組織化を変えることについて考えた。次にDMISにおけるカテゴリーの扱いを検討することによって、異文化感受性の概念を明確にすることを含め、このモデルを構成主義的に活用する方法を述べた。そして最後に、「異文化」から文化を外して「異」とすることによって、コンテクスト上の非対称性をカテゴリー化していることに注目できるようにすることを異文化コミュニケーション教育に取り入れることを提案した。

本研究ではBennettの考える構成主義や異文化感受性からの影響を異文化コミュニケーション教育に取り入れようとした試みになっているが、構成主義的なアプローチにはほかにも採用が可能である。たとえば吉田（2013）は、本質主義であろうと相対主義であろうと、静的で実体化された、観察可能な何ものかを文化として捉えていることに変わりはないのであるから、文化本質主義、あるいは、文化相対主義に対するアンチテーゼとしての見解において、文化それ自体ではなく関係に目を向けるべきと主張する。吉田は、静的な文化概念を解体し再構築する上で、文化そのものでなく関係へと視点を移行することが動態化を招くことに着目して、「他なるものとの差異の〈あいだ〉で絶えず揺らぎ続ける運動体でありながら、それ自体多様性を内在するものとして文化を捉えることは、文化にまつわる閉塞的な問題をブレイクスルーする契機となる可能性の発見につながる」（p. 32）のではないかと論考している。

また河野（2021）は「社会文化的要素が様々な相互作用を通じ個人に内化され、文化集団内に共有されるという理論的前提は、すでに構成主義者一般に了解されたものといえるが、その文化的枠組みの生成過程については、所与として意味付与された何らかの記号・シンボルを介した意識的、知的認知に依拠したものとみなされてきた」（p. 128）と述べ、環境を分節化し文化の境界を生成するプロセスには前意識的レベルでの身体の持つ生成的側面のあることを指摘している。吉田や河野の議論のような、間主観性への注目も重要である。このように異なる観点からのアプローチを用いることで、さらに多面的にこの問題が検討されることが必要である。人が生きる上で異文化コミュニケーションを学ぶ意義とは何かということに関連づけなが

ら、この分野における新しい知見を生み出すとともに、過去から蓄積されてきた概念や教育手法を再解釈し続けることによって、社会と研究者の相互作用の文脈に起こる相互構成、相互適応にも意識的になることが肝要といえる。

引用文献

Barrett, L. F. (2017). How emotions are made. The secret life of the brain. NY: Brockman. リサ・フェルドマン・バレット（2019）『情動はこうしてつくられる：脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』高橋洋（訳）紀伊國屋書店

Bennett, M. J. (1977). Forming/feeling process: The perception of patterns and the communication of boundaries. Unpublished doctoral dissertation, University of Minnesota, Minneapolis.

Bennett, M. J. (1986). A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10(2), 179-196.

Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press. pp. 21-71.

Bennett, M. J. (2012). Paradigmatic assumptions and a developmental approach to intercultural learning. In Vande Berg, M., Paige, M., & Lou, K. (Eds.), *Student learning abroad*. Sterling, VA: Stylus. pp. 90-114.

Bennett, M. J. (2013). Culture is not like an iceberg. Intercultural Development Research Institute のサイト内ブログ（2013年５月６日）, https://www.idrinstitute.org/2013/05/06/culture-not-like-iceberg/ 〈最終閲覧日2022年1月27日〉.

Bennett, M. J. (2014). The ravages of reification: Considering the iceberg and cultural intelligence, towards de-reifying intercultural competence. *Intercultural*, 72, 16-22. Fondazione Intercultura Onlus.

Bennett, M. J. (2017a) Development model of intercultural sensitivity. In Kim, Y (Ed), *International encyclopedia of intercultural communication*. Wiley, pp. 643-651.

Bennett, M. J. (2017b) Constructivist approach to intercultural communication, in Kim, Y (Ed), *International encyclopedia of intercultural communication*. Wiley, pp. 310-318

Bennett, M. J., & Castiglioni, I. (2004). Embodied ethnocentrism and the feeling of culture: a key to training for intercultural competence. In D. Landis, J. Bennett, & M. J. Bennett (Eds.), *Handbook of intercultural training* (3rd ed). Thousand Oaks, CA: Sage, pp. 249-265.

Chira, R. G. (2015). Intercultural communication and literature: Elif Shafak, The Bastard of Istanbul. *The Journal of Linguistic and Intercultural Education; Alba Iulia*, 8, 246-247.

Gergen, K. J. (1994). *Realities and relationships: Soundings in social construction*. Cambridge, MA: Harvard University Press. ケネス・J・ガーゲン（2004）永田素彦・深尾　誠（訳）『社会構成主義の理論と実践：関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版

Granata, P. (2016). Culture as mediatization: Edward T. Hall's ecological approach. *In/mediaciones de la Comunicación*, 11, 57-70.

Hall, E. T. (1969). *The hidden dimension*. Garden City, NY: Anchor.

Hemming, E. (2021). Public Communication, Digitalisation and Visualisation. *Rhetoric and Communications Journal*, 48, 126-136.

Hofstede, G., & Hofstede, G. J. (2005). *Cultures and Organizations: Software of the Mind* (2nd ed). New York, NY: McGraw-Hill.

Kelly, G. A. (1963). *A theory of personality*. New York, NY: Norton.

Kuhn, T. S. (1962). The structure of scientific revolutions. Chicago, IL: University of Chicago Press.

Makhmudov, K. (2020). Ways of Forming Intercultural Communication in Foreign Language Teaching. *Science and Education*, 1 (4), 84-89.

Maturana H. R., & Varela, F. J. (1992). *The tree of knowledge: The biological roots of human understanding* (Rev. ed.). Boston, MA: Shambhala.

Nguyen, P. M. (2017b). A critical analysis of cultural metaphors and static cultural frameworks with insight from cultural neuroscience and evolutionary biology. *Cross Cultural & Strategic Management*, 24 (4), 530–553.

Sun, H., & Gao, Y. (2020). An investigation of Chinese undergraduates' ability to translate Chinese cultural items into English and predictors of such ability. *Chinese Journal of Applied Linguistics*, 43 (1), 105-125.

Triandis, H. C. (1972). *The analysis of subjective culture*. New York: Wiley

池田理知子（2019）「他者との出あい：『異なる』という意味」池田理知子・塙幸江（編著）『グローバル社会における異文化コミュニケーション：身近な「異」から考える』三修社, pp. 12-23.

石黒武人（2016）「現象の多面的理解を支援する『コンテクスト間の移動』に関する一試論：グローバル市民の醸成に向けて」順天堂グローバル教養論集 1, 32-43.

河野秀樹（2021）「多文化性再考：文化としての身体性からの考察」目白大学人文学研究17, 117-130.

小坂貴志（2009）「多声化する異文化コミュニケーション研究・教育：分野を取り巻く成長痛を乗り越えるために」スピーチ・コミュニケーション教育 22 , 77-88.

中村恵子（2007）「構成主義における学びの理論：心理学的構成主義と社会的構成主義を比較して」新潟青陵大学紀要 7 , 167-176.

西阪　仰（1997）『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房

長谷川典子（2017）「『文化本質主義』をめぐる一考察：異文化コミュニケーション研究の視点から」北星論集 54（2), 1-10.

古家　聡（2017）「文化本質主義と異文化コミュニケーション研究」Global Studies（武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所紀要）1, 11-21.

ベネット, ミルトン（印刷中）「私たちはどこへ向かおう？：未知なる未来への意識を整える！」山本志都・石黒武人・ベネット, ミルトン・岡部大祐『異文化コミュニケーション・トレーニング：「異」と共に成長する』三修社
八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子（2009）『異文化トレーニング：ボーダレス社会を生きる』三修社
山岸俊男（2010）「文化への制度アプローチ」石黒広昭・亀田達也（編）『文化と実践：心の本質的社会性を問う』新曜社 , pp. 15-62.
山本志都（2011）『異文化間協働におけるコミュニケーション：相互作用の学習体験化および組織と個人の影響の実証的研究』ナカニシヤ出版
山本志都（2014）「文化的差異の経験の認知 : 異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述」多文化関係学 11, 67-86.
山本志都（2016）「文化的差異の認知の構造と異文化の境界水準との関係をめぐる考察：異文化感受性発達モデルとの比較と検証から」異文化コミュニケーション 19, 93-111.
山本志都（2018）「異文化感受性を再考する：認知的複雑性と非対称性のもたらす異文化的状況に注目して」多文化関係学会第17回年次大会抄録集 , 72-75.
山本志都（2019）「関係構築を可能にする多様なコンテクストの創出：コンテクスト・シフティング・エクササイズの実践」異文化コミュニケーション 22, 115-131.
山本志都（印刷中）「異文化コミュニケーションと成長：異対面から先へ、そして相対主義から先へと歩んでいこう！」山本志都・石黒武人・ベネット , ミルトン・岡部大祐『異文化コミュニケーション・トレーニング：「異」と共に成長する』三修社
吉田直子（2013）「対象としての文化から運動としての文化：文化の関係性を見ることの意味と可能性」多文化関係学 10, 19-34.

Leveraging Constructivism in Intercultural Communication Education Regarding Categories and Categorization: Focusing on Metaphor, DMIS, and “Difference”

Shizu Yamamoto

Abstract

This study examines how intercultural communication deals with categorization such as group units and conceptual categories including culture. For this purpose, the theoretical framework is drawn from the work of Milton Bennett, who has continued to take a constructivist approach in this field since the 1980s. Based on this conceptual framework, categories and categorization are discussed with reference to positivist, relativist, and constructivist paradigms. Then, methods for applying the constructivist perspective to intercultural communication education are explored. First, the metaphors of culture are examined. Second, constructivist applications of DMIS are

discussed. Finally, by removing the word “culture” from “intercultural communication,” this study suggests focusing on the “difference” emerging from differentiation and categorization, which arise depending on the various contexts.

註

1　本研究は科研費の課題番号16K04626による助成を受けている。本論文における論考の多くは、2017年および2019年の Milton Bennett 博士との研究会で交わした議論を基に発展させたものである。ここに心から感謝の意を申し上げる。

2　https://www.peacecorps.gov/educators/resources/iceberg/

3　異文化コミュニケーションという学問分野の成立自体は、それより以前の冷戦時代における米国の外交研究所にさかのぼるといわれている。

4　本論文では「構成主義」を英語で“constructivism”と書いたが、社会構成主義では“constructionism”を使うことが多い。“constructivism”も“constructionism”も、「構成主義」、「構造主義」、「構築主義」など、学問分野や文脈に応じて異なる訳し方をされている。千田（2001）は知識の利用の仕方や相互作用のとらえ方がミクロかマクロかの違いについて、行為者個人の側から焦点を当てた身体をめぐる系譜はミクロからのアプローチをする構成主義、社会的な知識がどのようなダイナミズムで生成されるかに焦点を当てるのはマクロのからのアプローチをする構築主義と訳が使い分けられることを整理している。しかしこの意味における構築主義が社会構成主義と同義に使われることもある。このような分類は Gergen（1994）や中村（2007）にもみられる。山本（印刷中）はどちらにも動詞の construct が共通することに着目して、異文化コミュニケーション教育の中では「人はいつも何かを構成している」ことを強調することを重視している。

5　川メタファーの発想は Maturana & Varela（1992）に着想を得たものであることが2019年の多文化関係学会第18回年次大会での基調講演「Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness: Constructing Self-Reflexive Agency（Metaconsciousness）」（異文化間意識のジレンマを調和させる：自己再帰的なエージェンシー［メタ意識］を構築する）で述べられている（2019年11月17日）。参考として、この講演の参加者による報告書は多文化関係学会ニュースレターに掲載されている。三河内彰子（2020）「『Reconciling the Dilemmas of Intercultural Consciousness: Constructing Self-Reflexive Agency（異文化間意識のジレンマを調和させる：自己再帰的なエージェンシー［メタ意識］を構築する）』に参加して」多文化関係学会ニュースレター36 5-8、Evanoff, Richard（2020）. Milton Bennett on Metaconsciousness, Intercultural Communication, and the DMIS. Japan Society for Multicultural Relations Newsletter 36. 9-13.

6　このように「異文化」から文化を外して「異」と表現することは、池田（2019）によっても行われている。池田は学習者に身近な「異」を捉えることに意識を向けさせることを意図してこの表現を用いている。